中学生の登校回避感情とその関連要因
～ソーシャル・スキルに注目して～

A98-4447　松永昌夫　（指導教官　朝倉隆司）

1.目的

不登校数が増加する中、「学校に行きたくない」という登校回避感情(以下回避感)を抱きながらも登校する子どもが増加傾向にある。回避感を抱く要因の1つとして、対人関係を円滑にする能力であるソーシャル・スキル(以下SS)の未発達が挙げられる。そこで本研究では、回避感とSS、コーピング・スキル(以下CS)を調査し、回避感の強弱とスキルの発達の関係を検討した。

2.研究方法

ⅰ)対象者　東京都内の公立中学校1校の285名

ⅱ)調査方法　無記名の自記式質問紙調査法

ⅲ)調査内容　①基本属性②回避感(6問)③SS(18問)④CS(30問)

ⅳ)分析方法　SPSSを用いて集計し、相関係数、χ^2検定、t検定、一元配置の分散分析と多重比較により各項目の関連を統計的に検討した。

3.主な結果と考察

回避感を得点化し以下の基準で全体を3等分した。

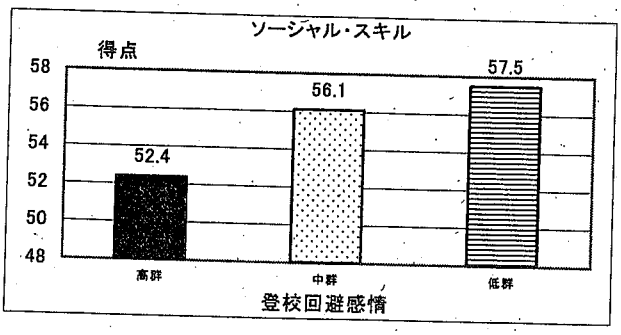
回避感情	高群	中群	低群
得点	18～30	13～17	0～12

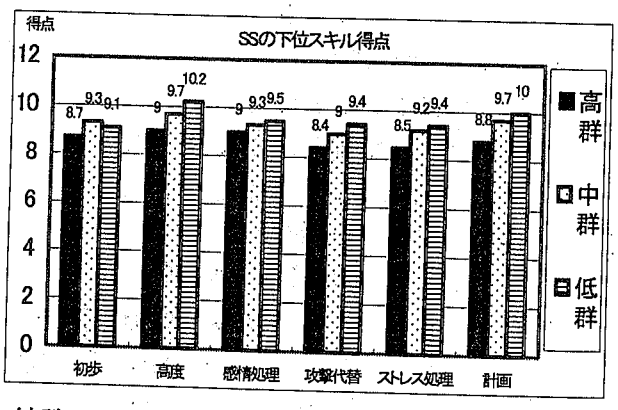
①回避感とSSの関係

3群間で、SSの下位スキル(6項目)のうち「高度」「攻撃代替」「ストレス処理」では高群と低群の間で、「計画」では高群と中群、高群と低群の間で有意差が認められた($P<0.01$)。「高度」では高群が9.0点、中群が9.7点、低群が10.2点、「攻撃代替」では高群が8.4点、中群が9.0点、低群が9.4点、「ストレス処理」では高群が8.5点、中群が9.2点、低群が9.4点、「計画」では高群が8.8点、中群が9.7点、低群が10.0点であった。特に「他人の話に参加する」等の「高度スキル」と「自分で判断し決定する」等の「計画スキル」における差が著しかった。またSS全体でも高群と中群、高群と低群の間で有意差が認められ($P<0.01$)、高群が52.4点、中群が56.1点、低群が57.5点で、回避感が強い者ほどSSが未発達であることが示唆された。

②回避感とCSの関係

3群間で、CSの下位スキル(3項目)のうち「積極的対処」では高群と低群の間で($P<0.01$)、「サポート希求」では高群と中群の間で($P<0.05$)有意差が認められた。「積極的対処」では高群が13.6点、中群が15.7点、低群が16.5点、「サポート希求」では高群が11.3点、中群が13.7点、低群が12.7点であり、中群の得点が低群を上回った。これは、特に「問題、課題を自己解決する」等の「積極的対処」において、回避感が弱い低群は得点が高いために、「周囲に援助を求める」等の「サポート希求」に頼らなくても、ストレス対処できていると認知したためと思われる。また、CS全体でも高群と低群の間で有意差が認められ($P<0.05$)、高群が13.7点、中群が13.3点、低群が14.0点で、回避感が強い者ほどストレス対処能力が未発達であることが示唆された。





4.結論

回避感を強く抱いている者ほどSSが発達しておらず、対人関係に困難を感じていることがわかった。特に、他人の話に参加する高度スキルや自分で判断し決定する計画スキルの習得が必要である。また、SSの発達が回避感の軽減と、CSの発達につながることがわかった。